以下少シトゲ
活字本ノ
トコロ大
64

三

我々は生命と云ふものを考へる時、いつも単に有機体を中心として それと環境との関係を考へる。無論環境と云ふものなくして主体と云ふものはなく、主体が環境を限定し環境が主体を限定するのであるが、多くの人は唯主体を中心として環境との相互限定を考へるだけである。生命の現象と云ふのは、具体的には矛盾的自己同一的世界の自己形成として考へられなければならない。

科学者トポロジイ的心理学者はレヴィンは考へ方をとり云ふ。アリストテレス的な物の考へ方とは、物体を主として之に対

日本文化

※アリストテレス的な物の考へ方とガリレイ的とを区別して

1 何業かの動揺を与へるかぎり、環境を考へる。ヴェクトルが物と環境との関係からでなく、物によつて定められる。例へば、軽い物が上に昇り重い物が下に落つといい傾向は、物そのものの潜在的と考へるのである。然るに之に反し近世物理学では、それは物と環境との関係から導かれる、重さそのものがかゝる関係に依存すると考へるのである。ガリレイの落体の法則の研究に於ての如く、すべて具体的な個物と具体的な位置との関係から、物の過程を考へるのである。それが実験物理学である。心理学もかゝる立場を取らなければならない。心理学的法則は生活空間から導

以上少ク下ゲ
活字本文ト
同大
以上
2字下

かねばならないと、(Dynamic theory of personality)。要するに、すべての科学的法則が第
一的自己同一的世界の自己形成から、即ち歴史的空間から
導かれねばならないと云ふことになるであらう。(経験科
学参照)。

我々は有機体と云ふものを考へる時、部分が何処までも
全体の部分であると共に、部分が独立的であり、部分が全体
を宿す と考へる。例へば我々の身体は無数の細胞から成
立し居る。単一なる生殖細胞の無限なる自己分裂から成長
する。それは全体的一の自己形成と考へられると共に、細胞
はそれぞれの独自性を有し、それぞれ独立に生きたものでなけ

日本文化

日本之花

ねばならぬ。全体的が細胞の統一として構成せられて居ると考へることができる。細胞が生きるかぎり全体が生きて居るのである。細胞が生きると云ふことは、細胞が独立性を有つことである。命とそのかぎり、又それは全体的統一を破る可能性、叛逆性を有つて居ると云ふことは、なければならぬ。細胞が全体的統一を救くのが病気である、その極が死である。嘗て「論理と生命」に於て云つた如く生命と云ふものは、いつも病気を含む、否死を含むことによつて生命であると云ふことができる。有機的生命と云へども、既に個物的多と全体的一との矛盾的自己同一と云ふことができる。無論細胞は何処迄

日本文化

ても身体の細胞である、一の多である。全体的一に對してそれぞれの機能を果すかぎり細胞である。併しそれが單に一の多となれば、全体的一はもはや有機体ではなくして單なる機械となる。生命と云ふものはなくなるのである。かゝる身体と細胞との問題は、之を突き込んで行けば、主体と環境との問題に入らねばならないであらう。環境と云ふものなくして、生命と云ふものないことは云ふまでもない。生命機能は環境を自己に同化することによつて生きるのである。環境と云ふのは物質界であり、環境を同化すると云ふことは物質を或形に形式することであるかゝる意味に於て

生命とは形成作用である。生命が環境を同化するのは細胞作用によるのである。個物的多として環境を同化するのである。細胞は物理的化学的に作用する物質的である。その意味に於て環境的である。併し生命と云ふのは単に多の一ではなく、細胞的作用と云ふのは単に物理的化学的ではない。多は何処までも一の多でなければならない。そこに生命の問題は世界の矛盾的自己同一の問題として進んで行かなければならない。生物的生命と云へども、矛盾的自己同一的世界の自己形成としてのみ考へ得るのである。云ふまでも生理現象と云ふものも何処までも物理的

日本文化

We perceive the relations of the parts and environment of an organism as being of such a nature that a normal and specific structure and environment is actively maintained. This active maintenance is what we call life, and the perception of it is the perception of life. The existence of life as such is thus the axiom on which scientific biology depends.

日本文化

く個性的な形でなければならない。物理的、化学的な時間空間の世界の枠の中に生物的生命の現象を入れることはできない。私は前に時と云ふのが相互に独立的なものの結合統一の形式であると云つた。世界と云ふのは何処までも時間空間の矛盾的自己同一的世界として作られたものから作るものへと動いて行くのであるが、物理的世界に於ては時が空間的であるが、空間に即して考へられる時は単に水である。時は故に時が眞に独立的なるものの統一とは云はれない。時は実質的であつ、時は唯同じ世界の繰返すに過ぎない。世界が何処までも同時存在的と考へられる。然

時そのものが独自性を有たない。

日本文化

元来

る時が独立的なるものの統一と云ふことは、時が物が時
に於て消えて生ずると云ふことである。併し唯同じ物が消
えて生ずる、単に同じ変化の繰返しと云ふならば、時と云ふ
ものはないと云ふのも同然である。時によつて物が変せず
水て行く、一時は瞬の前に返ることもできない、物は永遠に再び
同じ流に入ることはできないと考へられる。併し然云へば
時そのものもなくなるのではないであらう。時の現在に於ては過
去は既に過ぎ去つたものでありながら尚過ぎ去らないも
のであり、未来は来たらないものであるが既に現
水て居るものである。かゝる矛盾的自己同一として時の形

非連続の連続として

西田幾多郎

式と云ふものが成立するのである。時に於ては一度的なるものが相對立し相限定する。無限の過去と未来と隔てて物と物とが相對し相働くと云ふことができる。異質的なるものの綜合の統一の形式として時が独自性を有つと云ふことができる。具体的な世界は時の独自性を有つた世界、何処までも時間的な世界である。生物の生命現象と云ふのは、かゝる世界に於て考へられるものでなければならない。即ち時間的空間に於て考へられるものでなければならない。生物の細胞作用と云ふものは、何処までも物理的・化学的に考へられるものでなければならない。併しそれ

は時間的空間に於て特殊なる一つの世界を形成するものでなければならない。此世界を何処までも空間的と考へる時、此世界は等質的である。併し時間的と考へる時、此世界は異質的でなければならない。細胞の運動は、前者世界の同時存在的面に於ては、他の物質と異なる所はないが、時間的空間、私の所謂歴史的空間に於ては、異なった曲線を描くものでなければならない。世界を何処までも同時存在的と見るならば、生命の現象と云ふ如きものはない。生命の現象は時間的時間的でなければならない。過去未来を含む現在に於て見ればなるのである。

日本文化 それは歴史的空間の曲率でなければならない。

西田用紙

物と物とは何処までも空間的に対立

×併し一切生成変化は物と物との対立がなくなることを示す

働くと云ふことがなくなることである。

私は此歴史的現実の世界は何処までも物と物とが相働く世界、多と一との矛盾的自己同一の世界と云つた。物と物とが相働くと云ふことは、物と物とが一つの時の流れに入ることであり、物と物とが消え行くことである。物と物とが相働くと云ふことは何処までも一となることが多となることでなければならない。一が多の一、多が一の多でなければならない。時は何処までも空間的でなければならない。

想像　相働く物と物とは何処までも空間的に対立的でなければならない。物と物とは何処までも空間的に対立的でなければならない。

ない。

我々が働くと云ふことから、此世界があるのである。否、矛盾的自己同一的な此世界の個物的多として我々が働く

日本文化

なのである。

此世界に於て物と物とが何処までも対立的存在

と云ふことであり、物と物とが何処までも対立的存在

と云ふことが此世界が時間的存在と云ふことである。対立的なるものの

一となると云ふことが此世界が空間的存在と云ふことである。

統一として時と云ふものが考へられるのである。空間は自己自身を否定することによつて実在的空間であり、時は自己自身を否定することによつて実在的時である。絶対時は絶対空間、絶対空間は絶対時でなければならない。時はその成立の根源に於て空間的であり、空間はその成立の根源に於て時間的である。

存在は存在自己同一の世界に於ては、独立的なるものの統一として無数なる時が成立すると考へるこ

とができる。無数の異質的な時が成立するのである。無論それは逆に無数な時間的空間が成立すると云ってよい。即ち無数な世界が成立するのである。そしてそれは又無数なる生命の形が成立すると云ふことである。矛盾的自己同一的な歴史的世界は、無数なる種の生命の世界である。種とは我々の行動のパラデーグマである。環境が生物を如何に刺戟するか、生物が環境に對して如何に働くか。それぞれの動物に特殊な行動の仕方があるのである。それがホルデーンの所謂基準的な種的構造と環境との能働的維持と云ふものであろう。我々人間の生命もかゝる意味に於ての一種の種的生

日本文化

西田用紙

命であるのである。世界は何処までも対立的なるものの統一として無限と時間的であり、何処までも相対立するものの統一として無限と空間的である。全体的一と個物的多と矛盾的自己同一として、何処までも時間的と、何処までも空間的なる歴史的世界の種的生命は、何処までも全体的一と個物的多との矛盾的自己同一的でなければならない。個物は何処までも時間的と成立する、時間的と生れるのである。個物は時間的でなければならない。働くものは時間的と働くのである。時間的と働くと云ふことは、自己が他を否定し他が他によつて否定せら

日本文化

れることである。物と物とが働くと云ふことは、世界が対立するものの統一として一つの時の流れとなることであり、逆にかゝる矛盾的自己同一として働く物と物とが成立する。かゝる意味に於て、種の個物は一の多として、種から時間的に生れる。何処までも全体的一の個物的多である。種の個物である、即ち身体的である。それが個物的多としての我々の運命である。併し世界が一つの時の流れとなると云ふことは対立と云ふものがなくなることであり、世界が消え行くことである。時は空間的でなければならない、多の一でなければならない。個物は空間的でなければならない、時を否定す

日本文化

相対立するもの

るものでなければならない。一は多の一でなければならない。個物は種を否定するものでなければならない。個物は自由性を有たなければならない。併し又個物は種を離れて個物はない、種を否定することは個物自身の死である。故に種個物は種は個物の種、個物は種の個物として矛盾的自己同一として種的生命と云ふものがあるのである。多と一との矛盾的自己同一として作られたものから作るものへと、形が形自身を限定すると云ふことができる。種とは自己自身を形成する形である。作ることが作られることであり、生れることが死することである。

日本文化

西田用紙

右に云つた如く、矛盾的自己同一の世界は、全体的一としての時間的方向に於て、無限に種的形成的である。歴史的空間は種々なる曲率を有つと云ふことができるであらう。生物の細胞作用も、時間的曲率を極小とした歴史的空間に於ては、何処までも物理的、化学的現象に過ぎないであらう。併し時間的には、それは種的形成的でなければならない。それが一つの個体と云ふものを形成するのである、即ち身体を形成するのである。身体と云ふのは、世界が矛盾的自己同一的に

日本文化

＊自己自身の内に自己自身を形成する自己の映像

西田幾多郎

の自己同一的な形であるのである。生物の形と云ふのは機能的である。機能と云ふことは、全体と部分との関係から考へられねばならない。身体的個物即ち個体は世界を宿すと云ふことができる。故に我々人間に至っては、我々の身体を於て見ることが働くことであり、働くことが見ることであると考へられる。私は向こ物と物とが相働くと云ふことは物と物とが相否定することであり、一が他を否定すると云ふことは一が世界となることによって他を自己となすことであると云った。而してそれは又自己が自己を否定して他となることであり、両者共に自己自身を否定して一の

日本文化

多となることであるのである。何処までも個物相互限定の世界に於ては、個物は何処までも一つの世界となるのである。それ自身から動き行く歴史的現実の世界は、個物と個物との相働く個物相互限定の世界である。かゝる世界に於ては個物は何処までも一つの世界であらうとする。それに個物の個物たる所以のものがあるのである。併しそれは又何処までも個物が自己自身を否定することであり、一の多となることである。かゝる個物と世界との関係は機械的とも合目的的とも云ふことはできない。かゝる関係は個物が世界を映すと云ふのである。ライプニッツのモナドも

日本文化 ことでなければならない。

斯くして考へられるものでなければならない。かゝる個物が身体を有つのである、即ち個体的であるのである。我々の身体とは矛盾的自己同一的な世界を映すもの、世界の自己表現であるのである。ライプニッツが知覚とは多を一に於て表現することと外ならないといひしことの深い意義も此に求められねばならない。故に生物は生物的に進めば進む程、身体的個体となり、精神的個体となる。生物の生命現象と云ふものが明となれば成る程、身体と云ふものを有つ、個体的となるのである。歴史的空間が時間的曲率を有つ時、即ち世界が種的形成的なる時、物は単に物理的化学的ではなくして、細胞作用的である。生命は多と一と

日本文化

四百字詰原稿用紙

の矛盾的自己同一と云つた。細胞は何処までも全体的一から形成せられると共に、個物的多として独立的である。下等動物に於ては全体的一といいものが明確ではないが、高等動物に至るに従つて全体的一が明確となる、即ち個体的なる、身体を有つに至るのである。而して作られたものから作るものへと動いて行く、[illegible]めて生命が歴史的意義を有つのである。歴史的現実の世界はその根柢に全体的一を考へることもできない、個物的多を考へることもできない。多と一との矛盾的自己同一として世界は世界自身を形成し行く。全体的一的に、時間的に、何処までも自己自

日本文化

四日三版

身を形成するとして主体的である。何処までも個物的多として空間的に全体的一を否定するとして環境的である。併し多と一との矛盾的自己同一として、世界が世界自身を形成し行く所に、我々の生命があるのである。主体が環境を限定し環境が主体を限定すると云い、全体的一としての我々の身体は、個物的多として細胞的に環境化し、環境を同化すると共に、環境を同化することによって形成せられるのである。かゝる矛盾的自己同一の極致に達すれば達する程、眞の生命となるのである。生物的生命に於ては環境が尚外面的である、單なる對立的である。個物的多として單に物質

×環境なくして生命と云ふものなく、生命なくして環境と云ふものもない。

日本文化

的である。かゝる生命は尚環境的と云ふことができる。生命が尚個物的多に依存する、主体が尚眞に独立自由とならない。歴史的世界に於ては、何処までも単に与へられたものは作られたものである。生物的生命は尚作られたものに即して居ると云ふべきである。未だ眞に作られたものから作るものへとはならない。

歴史的現実の世界とは、全体的一と個物的多との矛盾的自己同一として、主体が環境を環境が主体を形成し、作られたものから作るものへと、何処までも自己矛盾的に動き行

日本文化

く世界、即ち自己自身を形成し行く世界である。我々が実在界の法則と考へられるものは、かゝる世界の自己形成の法則と云ふ性質を有つたものとして考へなければならない。それは発展の法則と生起の法則とが一である。目的因と動力因とが一つと考へられるのである。何処までも自己を目的として自己自身を形成し発展し行く世界が自己同一として何処までも同時存在的と考へられる時、それは動力因の世界である。物理的世界である。併しそれは時の曲率を極小とした歴史的空間の世界たるに過ぎない。それは此歴史的現実の世界を何処までもその一方向から見ることと、即ち空間的方向から見ることであつ

て、何処までも歴史性を離れることではない。それを離れれば、実在界の法則といい意義も史はなければならない。科学的法則ではなくなる。科学は何処までも操作的でなければならない。物理的法則と云いのも、時の曲率を極小とすることによって、何処までも繰返されると考へられる法則でなければならない。物理的操作によって歴史的世界の具体的位置から導かれる法則でなければならない。矛盾的自己同一的世界は歴史的現実の世界は其一面として何処までも空間的と見られる。併しそれは矛盾的自己同一として何処までも時間的に自己形成的である。主体が環境を、環境が主体を形成する。物

自己自身を形成し行く

西田幾多郎

理的世界と云ふのは、かゝる世界に於て、全体的一としての主体的方向を極小と考へたものである。併しそれは主体的統一がないと云ふことは出来ない。然らば世界と云ふものは矛盾的自己同一的世界である。矛盾的自己同一的世界は一面に何処までも主体否定の世界でなければならない。何処までも環境が主体を否定する世界でなければならない。併しそれは主体的でないと云ふことではない。然らざれば、世界と云ふものは出来ない。世界は何処までも主体が環境を環境が主体を形成し行く世界、自己自身から動き行く世界、生命の世界であるのである。何処までも個物的多と全体的一との矛盾的自己同

西田用紙

一として世界が生命的である時、右に云つた如く個物は身体的となる。個物相互限定の世界とは、個物が主体的に環境を主体化して自己が世界となろうとする世界である。かゝる運動が我々の身体的運動と考へられるものである。時間空間の矛盾的自己同一的に、所謂非連続の主宰の矛盾的自己同一的に、形が形成せられ、形が形自身を形成し行くのである。斯く歴史的世界が身体的となると共に、歴史的世界は闘争の世界となるのである。個物が何処までも主体的に環境を主体化せうと云ふこと、その事が自己矛盾であり、無限の闘争であり、自己矛盾である。生命はその成立の根柢に於て自己矛盾

的であるのである。故に生命は死を含むと云い、加之、矛盾的自己同一の世界は何と云った如く、何処までも空間的と時が否定せられると共に、無数と時の成立する世界である。それは何処までも空間的と一[illegible]なる環境に於て、無数なる主体と主体との闘争が成立するのである。個物は種の個物として主体的と環境と戦いのみならず、世界の個物として個物と個物と相戦い。時はその成立の根柢に於て空間的であり、空間はその成立の根柢に於て時間的である。矛盾的自己同一の世界に於ては、個物は何処までも時間的と種的と生れると共に、個物は世界の個物として相対す

49-64

日本文化

るのである。種は個物的多として自己自身を否定すること
によつて生き、個物は自己自身を否定して種的多(自己を主体的化する)
となることによつて生きる。併し種は世界の種であり個物は世界の個
物である。絶對矛盾的自己同一として、世界は作られたも
のから作るものへと自己自身を形成して行く。そこ
では何処までも主体は環境的であり環境は主体的である。
歴史的世界に於ての環境と云ふのは、過去未来を否定し(単に同時存在的な)物理的位置と云ふ如きものでなく、過去未来を含
んだ歴史的現在と云ふものでなければならない。歴史
的位置と云ふものでなければならない。

岡田用紙

そこから自己矛盾的にすぐ主体が成立するのである。作られたものから作るものへと我々が歴史的に創造的なる所に、我々は絶対矛盾的自己同一に徹して居るのである。歴史的創造作用に於て主体が即環境、環境が即主体である。

矛盾的自己同一の世界は、それに於て何処までも物と物とが相対立し、空間的に一である、即ち多の一である。かゝる方面に於ては何処までも物質的であるが、それが一の多として時間的であるとしては生命的である。而してそれが何処までも時間的として多否定的なる時、世界は全体的一として自己形成的となる。かゝる場合、個物は世界を宿すものとして、個体的個体的となり、

身体的となる。が、1方向に於て我々は意識的となる意識のである。
の世界が現れるのである。矛盾的自己同一の世界が一の多として何処までも
時間的と云いこと は、時が對立的なる。ものの統一の形式と
して、時が何処までも空間的となると云いこと である。而し
てそれは逆に何処までも相對立するものが一として、一つ
の時の流に入ること である。空間が時間的となること であ
る。此の如きが何処までも微定的な多と一との矛盾的自己同一
の関係が表現的と云いこと である。表出即表現といいライ
プニッツのモナドロジイは始めてかいる関係を明にしたもの
である。個物相互限定の関係は、表現的でなければならな

と云いこと ができる。

日本文化

私と汝と云い

西田用紙

い。モナドは世界を映すと共に世界の無限なペルスペクティブの一観点であると考へられる。多の一の世界が一の多として、空間が時間的となる時、世界は何処までも表現的とならねばならない。絶對矛盾的自己同一の世界は表現的に自己自身を形成する世界でなければならない。自己自身を形成する世界の個物として、個体的に世界を宿すと考へられる個物は、表現的でなければならない。故に我々の身体は意識的でなければならない。かゝる場合、私は歴史的身体的と云ふのである。一が尚多の一として、空間的(線的)となる時、我々の身体は生物的である。併し一が何処までも一として、多が一の多となる時、即

日本文化

對立するものの

×ライプニッツの云ふ如く、知覚とは多を一に於て表出することに外ならない。

~~世界は空間的~~ ~~共は時間的~~

ち世界が時間的、空間的なる時、かゝる世界の個体として身体は意識的である。世界が個物相互限定の世界となれば成る程、身体は表現作用的となるのである、意識的となるのである。意識と云ふのは、身体的発展として現れて来るのである。而し(意識作用と云ふも、又それは何処まで行つても、かゝる意味に於て身体的たることを失はないのである。)身体と云ふものは、(空間に即して)生物的にのみ考へる時、意識は身体を離れたものの如くに思ふのである。身体と云ふものなくして生命と云ふものなく、身体は個体的として元来自己矛盾的存在であるのである。かゝる自己矛盾の極限に於て我々は自覚的となる

西田用紙

のである。生物的生命の世界に於ても既に個物は個体的であり、身体的であり、動物の身体は空間的ではあるが、而も空間的に自己形成的である。それは機械ではない。生物的生命が発展すると従って、それは意識的となり、即ち本能的となる。本能と云ふことは、個物が世界を宿すことである。個物が時間的として空間的に一なる世界から独立することである。と云ふものも、既に個物相互限定の矛盾的自己同一的世界に於て本能が成立するのである。それは既に単に合目的的な植物的生命を越えたものでなければならない。人間に至っては、本能は欲求となる。欲求とは個物が世界を映すことより進

日本文化

生ずる自己形成の要求である。而してそれは逆に矛盾的自己同一的世界の自己形成の要求でなければならない。本能とは、空間的世界が自己矛盾的に即時間的として、自己自身を形成する自己形成の要求から始まる。故に主体的である。生物は本能的に環境を主体化することによって自己自身を形成して行く。何処までも個物相互限定の絶対矛盾的自己同一の世界の自己形成として、主体的と考へられるものは、歴史的社會的でなければならない。それは傳統と云ふ如き性質を有つたものであらう。而して主体と環境とが何処までも矛盾的自己矛盾的に相互に形成する。即

ち何処までも作られたものから作るものへである。矛盾的自己同一的に主体即環境、環境即主体たる所に、個物の相互限定があり、個物が真の個物である。而してそれは逆に世界が世界自身を限定すると云ふことである。

西田三郎